

Title	新しい環境での教育と研究
Author(s)	柏木, 哲夫
Citation	大阪大学臨床老年行動学年報. 1999, 4, p. 1
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/7248">https://hdl.handle.net/11094/7248</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

## 新しい環境での教育と研究

柏木哲夫

毎年卒業式の日、卒業する学生さんを自宅に呼び、食事を共にし、卒業証書を私から渡すことにしている。今年（1999年）も3月25日、6回目の行事に学部卒業生7名、修士課程卒業生2名が来てくれ、楽しい一時を過ごした。自宅が大学から車で5分というのが有り難い。

その時、就職難の話が出た。面接の時に「人間科学部ってどんなこと勉強するのですか」と尋ねられ、返答に困るといふ。私は「人間を科学的に理解する方法を勉強するところです」とお茶を濁す(?)のがベストの答えだと言った。内容は抽象的だが正しい答えだと思っている。

今年も“人間を科学的に理解する”論文が多く書かれた。七つの卒論と二つの修論のキーワードを並べてみると、高齢者像、中高年の価値観、在宅福祉、死生観、臓器提供、在宅介護、職務ストレス、引退不安、病棟環境となる。今年の論文は二つの特徴を備えている。例外なくしめきりぎりぎりに完成したことと、教授の指導力不足にもかかわらず、内容が充実しており、審査を依頼した他講座の教授から、高い評価を得たことである。

私自身は相変わらず、執筆と講演に多忙な日々を送った。1998年5月には、日本経済新聞社から、「老いはちっともこわくない」といふ、やや妙な題の本を出した。これは日経新聞に連載したコラムを中心にして、大幅に加筆したものである。超高齢化社会の大変さばかりが強調される中で、老いを前向きにとらえることの重要性を書いた。

私事で恐縮であるが、はからずも1998年度の朝日社会福祉賞を受賞した。この賞は、朝日新聞社が、社会の福祉に貢献し、功績があった個人・団体に贈るもので、私の場合、「ホスピス運動の先駆者として、末期がん患者のターミナルケアに尽力した功績」となっている。これは決して私一人に与えられたものではなく、全国でホスピスやターミナルケアに従事している多くの方々が受賞者であると思っている。ホスピスが社会的に認められたことの一つの証しであろうとうれしく思っている。

短い春休みが終わろうとしている。4月から始まる新しい学期に私たちの講座はまた新しい学生さんを迎える。新しく建てられた東館で8つの部屋が与えられているのは有り難いことである。研究室の窓から見える桜が散りはじめ、万博公園の木々に若葉が萌えはじめている。この良き季節、新しい気持ちで教育と研究に力を入れたいと願っている。

1999年4月

新しい教授室にて